



同志社の個性

——自由を愛する氣風を伸ばせ——

嶋田啓一郎

国内ユネスコ委員会が、國際的に推挙すべき日本の偉人の候補者の一人として、同志社の生んだ社会運動の指導者安部磯雄先生の名をあげているという最近の報道は、同先生を敬慕する私のところに深い感銘をあたえた。

「偉人」という言葉のひびきは、日ごろ先生に私淑し、みずからのおかれた場処で、いささかでも先生の生き方に倣いたいとねがう私にとっては、先生を自分から遠く近付き難いものに引き離してゆくように感ぜられて、むしろ私の実感からは遠いものであるが、学生時代から「安部先生はえらいな!」と、絶えず親しみのなかに深い尊敬の念を禁じ得なかつた真実のころもちからいえば、私にとつても、この人こそ偉人のなかの偉人であると言ふべき人物である。

私は教室で、安部磯雄先生の名をいくたび語り続けたことであろうか。安部磯雄、山室軍平、賀川豊彦——これら今は亡き信仰の達人たちは、その聲咳に接する毎に私の怠慢の魂をゆりうごかし、これら福音の行者の遺風を慕うて、社会問題の分野に献身する決意を与えられたのであるが、そのなかでも安部磯雄先生はとりわけ、こころのふるさとのごとくに感じられる風格の人であつた。

無産政党的党首としての辛苦は、世人の凡庸の能く堪え得るところではない。にもかかわらず、安部先生はつねに村夫子の温容をもつて、折から厳しい弾圧のもとに悲愴感のうず巻く左翼陣営に、淡淡として人格主義的社会思想の大道を説き明して止まなかつた。先生の風貌を憶うひとは、片眼つねに瞑して天上を思索するその静けさに、譬えようのない心の安らぎを覚えることである。「その人を想えばこゝろ和めりしあゝわれもまたその人たら

まし」私はいまも斯くおもう。安部先生こそは、同志社の個性の象徴である。

古色蒼然たる赤煉瓦の同志社チャペルで、白髪童顔のこの老人は、新島襄先生の遺影を背にして「わたしは人生の長い道のりを『安部、お前は良くやった』と新島先生から一言いつて貰いたいという只一念で戦ってきました」と涙に咽れたとき、並み居る学生、青年は均しく泣いた。その感激を兎戯に類する感傷と評するひとがあるとするならば、それは、人生の荘厳さに正面から真向ってゆこうとする同志社人の真髓を知らぬ人である。

安部先生の真の偉大さは、信仰者の誠実を事も無げに押し通してゆく「人生は平生心」のなかにある。気取らない。見せかけない。街わない。偉大さは、自由に思想し生活する人の謙虚さのなかにある。山室先生や賀川先生の風格には、俗人をしりぞける聖者のきびしさがあつたであろう。しかし安部先生は、いつも「あたりまえ」の面持で静かに語りかけ、私ども一人ひとりに各々の持ち場で、背伸びのいらぬ「在りのまま」の能力を、ただ一筋に誠意のなかで活かしてゆくことを教えられた。それなら無精者の自分もある程度ついてゆくことができそうだと、誰しも気が楽になる。それなればこそ、安部先生がいま「偉人」の位に押しあげられると、遠く引き離される心地がして、「ソツとしておいで呉れ」と言いたくもなるお互いである。

二

今日の社会は、大量生産のための企業のマンモス化につれて、大

衆が群衆のさなかにあつて孤独化してゆく状況におかれている。

経済成長はおのずから管理・統制の分野を拡大し、官僚組織による合理的運営を避け難いものにするが、それは他面において個人の自由領域を制限する。非人格的な組織の力が外部から人々を規制してくることによって、大衆は相互の連帯感情を切り崩されて、次第に親密感を見失ひ、個人の孤独、不安定感にさいなまれる受動的な存在へ移り変わってゆく。リースマンのいわゆる「孤独なる群衆」が、そこに佇む。そこでは個々が自己の自主的主体性を失ひ、ただマス・メディアの受身の対象として、大量販売のメカニズムによって画一化された行動様式から、社会的に孤立感を抱き、ひたすらに受動的となることから生まれ無力感に喘ぎ、自我の要求実現の方向をもち得ない焦燥感に悶えている。

そのような精神的状況のなかで、とくに人格形成に使命感をもつ学園が果たなければならない任務は、人間の生命に畏敬の念を抱き、その立場から自由にものを考え、それを根底として創造的に文化を築きあげてゆく若者たちを養成することにある。社会制度の側からの強制的な個人自由の抑圧に抗して、人間相互の生命尊重のために、気力をもって自主独立の行動を展開し得るような青年男女を輩出することにある。無力感に悩む現在の大衆社会状況のもとで、自主独立の人間を養うことは、個性を重んずる教育を大切にするのであり、個性を相互に尊び合う家族、近隣社会、職場集団を築くことである。

齢を重ねる毎に、私は同志社に働くことの喜びを深くする。

「自由は予が活ける標語である(Freedom is my living motto)」

と新島先生は記されたが、生涯を日本人の自由のために戦った新島先生の気風は、この学園にいまも脈々として流れている。私はここに学んで、自由の何たるかを教えられた。自主独立は、ただ自主独立たるがゆえに尊いのではない。宇宙絶対者の真理に就けるがゆえにこそ、他の何ものにも屈せざる自主独立が尊いのである。聖書は「真理は汝らに自由を得さすべし」と教えているが、神につける真理に心魂を委ねた人は、みずから深く特むところあるがゆえに、周辺の思惑に気兼ねすることなく、人生の大道を悠々と闊歩し得て、狼狽することを知らない。

そのような自主独立の精神なくしては、人は真実の愛の体験にめぐり合うことができない。ニーチェは、キリスト教的愛をもつて奴隸の道徳であると言ったけれども、屈従精神のもとでは、人は如何にして自己に属すべきものをも献げて隣人を愛することができようか。神に特む強い勇氣をもたずしては、まことの愛はうまれないのである。

時代が過ぎにこたえて、同志社が若者たちに期待するのは、真理のもとたらず自由に強く立つ自主独立の人格形成である。

三

明治の疾風怒濤時代に成長した同志社は、幾多の主張に満ちた人物を世に送っている。封建社会より文明開化への転換期に当たって、新島襄その人の四十八才の短い生涯もまた止み難い主張の連続であった。しかし同志社は、わが国の封建制を破る新興ブルジョワジーの成功とともに、その歴史的使命を終わつたのではない。

い。私たちは、世界史の進展のただなかで、つねに新しく同志社立学の精神を読み直し、その不滅の生命を「今、此処に」体験しようとしている。その同志社につねに新しい生命をあたえるものは、聖書から滲み出る自由を愛する魂である。

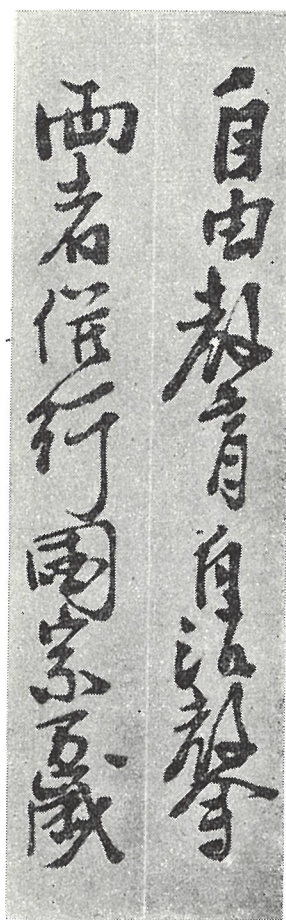
私たちは、同志社を時代から後ろ向きに萎縮させ、形骸化させることを厳に戒めなければならない。ただ現代社会の企業従事者あるいは官公吏として、就職の技術に習練せしめることをもって同志社存立の意義は満たされると思う教師や父兄があるとするならば、すでにそこでは同志社はその個性を失っている。私たちは愛する若者たちが世に立つて働く真の手腕力量を養わんことを切に願う。その一点において、父兄と教師の念願とするところには聊かの変わりもあり得ない。しかし同志社が単に就職の手段となるところにのみ、同志社の繁栄が約束されるというのであるならば、私たちは徒らに学生数の増大に酔うことなく、寧ろ私学経営の苦難に堪えて、たとえ小規模なりとも同志社立学の根本を固守すべきである。質の満たされない量は、むしろ有害である。

近代の大学は、科学の名において人間生活の客観的事実を教示するけれども、生活行動は客観化認識による経験的事実の確定だけで成立するのではなく、それらの技術と倫理的価値判断との統一を俟って、初めて現実の人間行動となるのである。「吾人は敢えて科学文学の知識を学習せしむるに止まらず、之を学習せしむるに加えて、更に是等の知識を運用するの品行と精神とを養成せんことを希望するなり。」（『同志社大学設立の旨意』）斯くして新島先生は、官学に対するこの「私立大学特性の長所」を、同志社

の譲り難い存立意義と確信せられた。同志社は、科学的知識とともに倫理的価値判断を、筋道を立てて教育することによって、人間として真に迫力のある力量の人物を世に送ることができるのである。

その倫理的価値判断は、例えば利潤追求一点張りの人のまなこには、時として世の愚か事と受け取られることもある。しかし絶対者を中心として人間生命の尊重にめざめた若者の魂は、世の毀譽褒貶を超えて、みずからに恃むところのある充実した生活感をもって生き抜くことができる。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いと知らなければならない。

みやこを遠く離れた僻村に、同志社人とめぐり合うことがある。彼は其処に悠々として、天を愛し人を愛する同志社魂を守り続けている。世の価値判断からみれば、必ずしも榮譽の道を歩む人とはいえないであろう。しかし彼は不拔の自由精神を守り続けて、信念に生きる生活態度を崩さない。そのようなとき、私は決まって安部磯雄先生の風貌を念頭に思い浮かべる。つねに「人生は平生心」の道を静かに生きて、誠実一路に人事を尽し天命を俟つ、その自由人の態度のなかに、同志社人の真髓があるのではなかったか。



一 学生に与えた新島先生の書簡より

四

「安保闘争」「原子力潜水艦寄港反対」というような政治的ビラに縁のない学園を造って貰いたい——という一部の父兄の声を聞く。わが子の安穩な将来を願われるその心情は、理解に難くない。新島先生は「若し教育の主義にして其正鵠（せいこう）を誤り、一団の青年を導いて、偏僻の模型中に入れ、偏僻の人物を養成するが如き事あらば、是れ実に教育は一国を禍ひするものと謂はざる可からず。」と断ぜられてゐる。同志社教育は、決して奇矯偏向を事とするものではない。

しかし人間尊重の良心を待みとして、一国のために未来のとりづらを開かんとする若者たちが、時代の悩みを己が悩みとして直視することを知らず、ただ父母の温情に甘えて自己の立身出世、少なくとも明哲保身に汲々とするのみであるならば、その若者たちはやがて社会の責任ある立場におかれたとき、自己の責任を担う同僚、部下たちと真情を交わして、辛苦を共にする有為の人物となることはできない。大衆がいま孤独なる群衆のひとりとして、「無用人」の境地に転落しつつある時勢にあつて、再び愚かしくも世を戦争に押しやる過ちを犯すまいとして、懸命に知性と熱意とを守り通そうとする集団が、大学のなかに存在し得ないとすれば、「良心を手腕に運用する人物」の養成は、在つて無きに等しい。

未来は若者たち自身のものである。彼らをして自由に思索し、自由に討議せしめよ。その時くところは彼らみずから刈り取らね

ばならぬ。私たち教師は忍耐強く、その責任を若者たちとともに語り合うであらう。

同志社大学の構内はつねに貼り紙に雜然として、美の何たるかを知らぬものの如くである。教職者の責任であるとは非難する人があるが、確かに褒めたことではない。しかし同志社の学生が、この時代の大なる転換期に、森閑として沈黙し、就職試験一本の学生生活に転向したとすれば、同志社はほんとうにそれでいいのであらうか。

構内の清潔整然たる秩序を求める一念に変わりはない。しかし同志社が自由尊重の氣風を養うためには、この混雜も学生の無氣力には遙かに勝るものと言ふべきではないであらうか。願くばその活氣が、一部学生の独断に止まらず、学生全体の思慮あり秩序ある討議をうむものとなれ。

新島先生は徳富蘇峯氏に書を送つて曰く、「同志社の生徒全体が本日の如き自由を愛する元氣を示せしは、小生も未だ嘗て目撃せざる所にして、小生も天父の恩恵を蒙り、今日迄此世に生息するを得て、如此自由を愛する精神の我校中に発達し来るを見るを得るは、天父に向い偏へに感謝する所、又生徒に対して大に満足の意を抱き、小生も余り無益には今日まで生息せざりし事を少しく感じ居候。」

この悦びのなかにこそ、同志社の個性が活きていると言ふべきである。
(文学部教授・社会福祉学)

一 宗教々師の意見

緒 方 純 雄



—
万をこえる学生のうちで百数十名しかいない神学部と、そこにいる十数名の教師はそれなりに学園の中でも興味をひくものと思われる。しかし、興味のもちかたも以前と今とではかなり違ってきている。例えば、以前には神学部にいるものの奇妙な生き方は時には畏れをもまじえて興味をひいていた。いいかえれば、かなり他と異質であることによって興味をひいていた時代もあった。私自身同志社には編入学しているが、入寮手続をしに神学生寮を訪れた日のことを今でもまざまざと覚えていて、案内をこうて玄関に立っていると、程なく階段をおりて自分に歩みよってくる人の全身ににじみ出ているきびしさに、思わず身のすくむのを覚えた。聞けば副寮長だとのこと、寮長はどんな人であろうかと恐れさせした。経済学を専攻していた者が思いつめてとび込んだ

のであるが、それをもたじろがせるようなものが、寮の中に、人の中にあつたのである。また、宗教は日本人にとっては奥まつたものであり、超俗の意味をもっているし、神学館の外観、位置からしても、神学部はますます他と異なっている印象を与え勝ちであつた。

しかし、こうしたどちらかといえば神秘的なヴェールは今では取り除かれてゐる。日本社会と異質的であることによって、キリスト教がキリスト教であらうとするより、むしろ社会の中にいて人々との連帯のうちに生き、行動しようとする態勢をとつてきている。神学生も学生全体と連带的に考え、行動している。その人柄、才能もとくに知られているし、学力も入試、平常のクラスで試験済みである。教師の殆んどが学内の諸委員会に列している。外人教師数を差し引いて十名そこそこの教師にたいして、学

内の委員会を教える」と否応なしに全員が委員なのである。教師はまた組合員である。教授会も必要となれば組合支部会に早変わりする。教師は大会の代議員であり、執行委員であり、団交委員でもある。こうなると、思想も行動も公開されていて、他の人々にとっては、神学部者たちも同じ人間仲間なのである。そうなる、異質の少数者であることによって興味をひいていたが、今では同質の少数者であることから興味をひいているようである。しかし、興味といえば、異質であるからこそ湧くのであって、同質のもの、同じものにたいして湧かないものである。強いて興味があるとするれば、少数者であり、小さいという点であろう。そこで興味は質的というより、量的である。ものが量的に考えられると小は大に劣るのであり、価値をもたない。つまり他の学部、団体と比較すれば、神学部はとるに足りない学部になり、独立採算など思いもよらない……。そのような少数者が何を考え、行動しようとしているかは、かなり興味をひくことであろう。こうした興味は公平で、現実的であると私は考える。

私は神学部で教えながら、数年間大谷大学で教えたこともあるし、現在では一般教育の宗教学をも担当している。仏教大学、一般教育、神学専門教育の経験のうちから意見を述べてみよう。

二

神学専門教育についていえば、同じ宗教のうちに生き、同じ目標をめざしている者たちと生活し、教えることは教師にとってこれ以上のことはない。他の学部に減多にないことである。しかし宗教的生とは以前とはかなり違ったものとして扱えられている。

かつては、宗教的生とは行為以前のものであり、行為をうみ出すような生と考えられていた。それは一応行為とはいわば次元を別にするものであった。それは内的生であると強調されていた。宗教的生とは深く内的なものであって、教師はこれを自ら示さねればよかった。行為はいわばこれを象徴するものにとどまつた。しかし、宗教的生とはこのように内的なものに偏したものでなく、行為を含む全体として考えられている。行為化するのではなく、その内的なものは偽りである。内的なものは、外に行為化するものでなければならぬ。行為化といっても、象徴的行為でもなく、またいわゆる「宗教的行為」に終わるのではなくして社会的、政治的実践行為をも意味する。このように宗教的生とは具体的に実践的に生の全体として考えられている。

さて社会的、政治的行為という場合、適確な社会的、政治的認識と判断が要求される。そして、これらは大抵専門家によってわれわれに提供される。そうすれば、われわれとしては、一般の人人と同様に認識し、判断するのか（つまり宗教をぬきにして）、それとも宗教からしてこれを奥行きをもたせるかのいずれかとなる。それとも、宗教が人間についての徹底した見通しをもっている、一方では政治は人間が作るものとするならば、宗教は政治についての見通しをもっていることになる。このようなかたちで、専門家をぬきにして宗教から社会的、政治的認識、判断ができなだろうか。このように、行為とか実践という場合、それに先立ってわれわれは、宗教をぬきにするか、それとも専門家をぬきにするかという問題の前に立たされる。宗教においては、内面に

いて烈しく、一途であればあるほど、行為はほとばしり出る。これを抑制することは困難である。それは急性に、不注意に——殊に社会的、政治的行為の場合——営まれる。動機においてきびしくあっても、行為化される時には容易に既成のものと結びつく。容易に既成（保守であれ、革新であれ）の思想路線をかりて、行為化される危険を胎む。ひずみの多い日本の社会の中で、一途に宗教的信念を行為化しようとする学生につき上げられては、右のような問いを自分にも、学生にも投げかけている。教師は宗教学生を単に内面を強調するのみではなくして、内的なものをいわば活動家の行為とまでして行く苦勞を荷わされている。一教師として、これについては学生から学んでいると告白せざるを得ない。

三

一般教育の宗教学を担当しているが、日本の大学で、しかも一般教育の中で宗教を講ずることほどむずかしい仕事はあるまい。ありとあらゆる宗教が雑居し、しかも平素見なれているのが話しにならぬような宗教である。そういう中で宗教を講ずることは、かなりの苦勞である。一般教育における宗教学については、私は二点についてのみ述べよう。

先ず、宗教を一般教育の中に位置づけることには、かなりの抵抗があろう。なぜなら、宗教はロゴスとか理をこえるもの、あるいはこれに対立するもの（パラドクス）であるからである。すなわち、一言でいえば、非合理的であるからである。したがって、合理的思维の厳密を要求する学問とは異質的であり、学問の中に位置づけられないものと考えられる。しかし、一方において信ぜられる

ものが非合理的なものでありながら、その非合理的なものが人間によって受け入れられているという事実を見れば、非合理的なものとの人間との関係について何らかの理が成り立っていないければならない。それはかなり強い理であるにちがいない。なぜなら、非合理的なものでありながら、人間がこれを受け入れるに至らしめられているからである。つまり、それ自身が非合理的でありながら、それを受け入れる人間との実存的関係については、われわれは理を追うことができると思える。この場合、対象と人間との関係については、実存的関心はいうまでもなく、充分学問的研究が可能であり、したがって、学問の中に位置づけられるものである。

第二の点は文化と宗教についてである。文化は人間によって形成される。しかし、人間が自然にとどまるところには文化は形成されない。文化は、人間が自然をこえて主体的に行為するところに形成される。

しかし、人間の主体的行為によっても、戦争のように組織化された殺人民行為は文化と呼ぶことができない。すなわち、価値判断が働いて、同じく人間によって形成されながらも、文化と文化でないものに区別されている。

そうだとすれば、文化は人間の主体的行為によって形成されるが、これによってある価値をもつものが成り立つところに文化が成り立つことができる。

人間の主体的行為がある価値を成り立たせるという場合、それは人間が価値を実現しようとして行為して初めて成り立つものである。そのような価値は価値意識として行為する人間の意識上に

っていなければならない。主体がみずから価値をえらびとり、それが動機となり、行為へと踏み切らせなければならぬ。さて価値をえらびとる場合、それは先ず実現しうる価値であろう。

また、実現しうるという場合、当然時間的、場所的限定が考えられる。それは歴史的、民族的、国家的、地域的である。時と所を異にするにしたがつて、実現しうるものも異なる。時と所とを異にするにしたがつて、実現可能な価値も異なるとしても、価値という以上、そこには何かに照らして価値あるものと価値なきものとに判別している事実がある。すなわち、何かを究極的とし、それによって価値判断をし、これを行為に移そうとする事実がある。

他方、文化は地域、民族、世界文化とはいわれるが、個人文化ということとは考えられない。したがって、何かを究極的とするといっても、単に個人のレベル、個人の判断によるだけでなく、集合的に、共同体的に何かを究極的と見ているのである。それは集団、共同体によって確認されるような究極的なものであり、まさしくこれによって文化が成り立っている。

また、人間の行為は過去から現在へと続けられて、漸く何かを成就するものであろう。積みあげられて初めてかたちをとるものであろう。文化が成り立つということもこのように考えられる。ローマは一日にして成らないのである。したがって、文化を成り立たしめる究極的なものも、集合的、共同体的に確認されるだけでなく、歴史的に過去にも今にも究極的とされるものであろう。

私は宗教を人間の究極的關係と考える。宗教が真に人間の究極的關係であるならば、そして述べてきたように、究極的なもの

上に文化形成があるとすれば、宗教は文化形成の根源という位置を必然的に占めることになる。しかし、この場合、究極的なものとは共同体によって、また歴史によって究極的と認められるようなものである。すなわち、共同体、地域、歴史のテストをうけて究極的と判定されるものである。したがって、宗教が人間の究極的關係といっても、共同体、歴史によってそのように認められるのでなければ、文化と深い関係をもつことはできなくなる。つまり、すべての人に、またいつの時代にも究極的關係でありうる宗教でなければ、文化を形成する資格をもたないのである。私はこのようにして、文化とかわりをもつ宗教を示唆し、このような宗教こそ宗教であると理解してもらいたいと願っている。

もちろん、宗教を人間の究極的關係とするならば、さまざまな宗教を通してわれわれは人間の究極的關係についてのさまざまな理解に導かれ、ひるがえってこれによってわれわれの実存への洞察を深めることができよう。いずれにせよ、一般教育における宗教は苦勞の多いものではあるが、キリスト教の立場だけからではなく、教育全体からいってもやり甲斐のある科目だと考える。宗教関係大学ばかりでなく、全部の大学が同志社に倣ってほしいものである。しかし、それを担当する教師もなく、その必要も自覚されていないところに、この国の将来の不毛、文化の無根底性、ひいてはファッションを追うような流行性が暗示されている。

一宗教教師として感じたままを述べたが、神学部教師を代弁したのではない。最近折りにふれ感じたり、考えたことを述べるにすぎない。

(神学部教授・組織神学)